

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



# 水泳学習スタート！！

先週から、水泳学習が始まりました。

メディアクリエイターの増田さんもプールに同行して写真を撮ってくださったので、何枚か紹介します。



水泳が得意な子も苦手な子も、自分の力に合わせて練習を進めつつ、楽しく学習に取り組んでいるようです。

水泳と言え、私には強烈な思い出があります。

他の運動は大好きなのに、水泳だけは嫌いでした。

理由は非常にシンプルで、泳げなかったのです。

今思い起こせば、小学校 6 年生の頃にも 25m を泳げるのはクラスでも 1～2割といったところで、多くの子が泳げないまま卒業しました。

北海道という地域柄、水泳学習に割く学習時間が少なかったこと（その代わりにスキー等のウィンタースポーツの学習時間が長いです）も影響していますが、とにもかくにも水泳が苦手なまま私は大きくなりました。

大人になる過程で何とかそれなりに泳げるようにはなりましたが、今でも苦手意識は消えません。

一方、こういう過去の体験があるから分かりませんが、私は水泳の指導に関しては非常に自信があります。

自分が苦手だったからこそ、どこでつまずくかがよく分かるのです。

昨年まで、故郷の北海道において過去の自分のように全く泳げなかった子どもたちを指導してきましたが、およそ 4 時間の学習の中で毎年 9 割以上の子が泳げるようになりました。

もちろん、もっと潤沢に学習時間があつた奈良県の学校で勤めていた時は、毎年クラス全員が 25m を泳げるようになりました。

それもこれも、自分が苦手できなかったという経験が強く影響しているわけでして、「苦手意識」や「挫折経験」はあながち悪いことばかりではないことをこれまでの人生で数多く体験してきました。

もう一つ加えると、水泳と合わせて同じくらい嫌いだったのが音楽でした。忘れもしない小学 1 年生の頃。

初めて習った鍵盤ハーモニカ。

指使いがむずかしくて、「子ぎつねこんこん」という曲が全然弾けませんでした。

ふととなりを見ると、友達の女の子はすらすら弾いています。

でも、何度練習しても自分は上手く弾けません。

その瞬間から、音楽が嫌いで苦手になりました。

演奏はできない。音符も全く読めない。

その状態のまま中学校を卒業した自分が、その後バイオリンを始め大人になっても演奏を続けているとは、小学校の頃の私は絶対に信じないでしょう。

ちなみに、2年生の道徳の教科書には、こんなお話が載っています。

## 「どうしてうまくいかないのかな」

本を読んだら、とちゅうでつかえるわたし。

鍵盤ハーモニカをひいたら、ちがう音を出してしまった私。

どっちもあんなに練習したのに。

図工の時間にもいちごをたくさんつくったら、友達がそれを見て

「おいしそうなミニトマトだね。」

と、言いました。

どうしてわたしがすることはうまくいかないだろう。

すると、おかあさんが

「みきはうまくいかなとなやんでいるみたいだけどいろんなことをがんばっていてえらいと思うよ。」

おじいちゃんも

「一生けんめいがんばるすがたは周りの人を元気にするんだよ。おじいちゃんは今のままのみきがすきだよ。」

と、にこにこしながら言ってくれました。

自分のことが前よりもすきになったみきさんなのでした。

「うまくいく」という経験は大切です。

それと同じくらい、いやそれ以上に「うまくいかない」という経験は大切なのだと思います。

なぜなら、人生は「うまくいかないこと」の方が圧倒的に多いからです。

「出来ない」という経験にどうやって向き合い、

「うまくいかない」という段階をどうやって乗り越え、

「失敗や敗北や挫折」という苦い体験からどうやって前に進んでいくか。

これは、先の「心の成長」という観点からいってもとても大切な意味をもちます。

小さい頃は、誰もが「全能感」をもっています。

自分は何だってできるし、何にだってなれる気がしています。

けれど、経験を重ねるごとに、先の教材文のような「うまくいかないこと」が徐々に出てくるようになります。

そして、人は学んでいきます。

「すべてが完璧にできる人間はいない」という事実を、です。

全ての人は、「できないこと」や「うまくいかないこと」と共存し、折り合いをつけながら生きています。

もちろん、ここから「なんでも早めに見切りをつけてあきらめなさい」ということを学んでほしいわけではありません。

何でもかんでも逃げて避けてばかりでは、豊かな人生を送れないことは多くの人が承知していることでしょう。

人は生きている限り「うまくいかないこと」を経験し続けるわけですから、時にそれを避けたり、時にそれを乗り越えたり、時に別の方法で代替してみたりとケースによって「使い分ける」ことが求められます。

色んな道があることを学ぶことは、そのまま「生きる力」にもつながります。

そして、先の文にある通り、その生きる力が湧いてくる源となるのは、ありのままの姿を認め受け止めてくれる「身近な人からの愛」なのだと思います。

これは、すでにエビデンスも出ています。

家庭での「豊かな会話」と「豊かな食事」という体験が、子どもたちの学びに向かう意欲の源泉になっていることが、東北大学と仙台市教育委員会の研究により明らかになっています。

うまくいっても。

うまくいなくっても。

あなたはそのまま素晴らしい、そのままのあなたを愛しているよ、と伝えてもらえる経験は、そのまま生きる力につながっていくのだと思います。

そうそう、この夏休みに面白い記事を発見しました。

元メジャーリーガーのイチロー選手が語っている内容です。

タイトルは「ムダなことをしないと、合理的になれない。」

内容を抜粋して紹介します。

高校生たちへのコーチング後のインタビューで、限られた時間の中で合理的に練習を進めようとするのを仕方がないとしながらも「無駄なことから学ぶことは多い。無駄なことではできるだけやったほうがいい、じゃないと合理的になれない」と語った。新しい発見や効率化へ至るには、遠回りこそが最短の道。



「出来た！」という経験も大切で、「出来ない…」という経験にも大切な価値があります。

水泳だけでなく、子どもたちが日々自分の壁にチャレンジし乗り越えようとする姿を応援し続けていきたいと思います。(渡辺道治)

## ☆【先生の得意技紹介します】☆のコーナー

SOLAN 小学校で一番怒らせてはいけない人物をご存じでしょうか。

そうそれは、副校長の山田先生です。

先日、山田先生と食事をした時のことです。

過去に経験したことのあるスポーツや趣味の話題になったときに、思いもよらない体験談が出てきました。

何かというと、武術のテコンドーです。

韓国に留学していた時に始められたそうで、私は話だけでなく実際の動きもその場で見せてもらいました。

そこで披露された見事な「前蹴り」。

「ビシッ！」という効果音が見えるのではないかと思うほどの鋭い蹴りを目の当たりにして「山田先生を怒らせないでおこう」と私は固く心に誓いました。

もちろん、武道だけでなく山田先生は芸術も愛されています。

過去に最も熱を入れて打ち込んだ経験は何ですかと問うと、真っ先に出てきた答えが「アカペラ」でした。

歌って戦える副校長先生なんですね。

尚、得意曲は「はじめてのチュウ」だそうです。

興味のある方は、ぜひ今度リクエストしてみてください。



(投稿企画に多数のご参加をいただき、感激しております。気軽に楽しくご参加いただければ幸いです。)

- ① 小学生時代のおススメ本…「読書は、宝の山への旅」そんな言葉があります。新しい考え方に出会い、新しい言葉を知り、時には冒険し、時には迷い、そして時に感涙する。価値ある本との出会いは、人生を豊かにしてくれます。そこで、みなさんが小学生時代に読んだおススメの本を教えてください。「お父さんやお母さんが子供のころに読んだおススメの本」という言葉の響きは、子どもたちの読書熱をさらに高めてくれることと思います。
- ② 小さい頃の夏休みの思い出…先日、あるクラスの学活で「夏休みの思い出を守れゲーム」というレクを行ったそうです。自分の夏休みの思い出を5枚の短冊に書き、先生がそれを当てに行くというゲームなのですが、その中で外国人の先生が「スイカ割りをした人？」を尋ねると、なんと1人も手が上がらなかったそうです。夏休みの代名詞のようなスイカ割り文化も、現代では少しずつ変わってきているのかもしれませんが。そこで、お家の方々の子どもの頃の思い出をいろんな角度から教えていただければと思います。古き良き時代の文化に子どもたちが興味を持つきっかけにもなりそうです。

↓↓↓ご参加、お待ちしております↓↓↓

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](https://www.google.com)